

王であるキリスト

2011.11.20

マタイ 25・31-46

今日の日曜日は、教会の典礼暦では今年最後の主日になります。来週の日曜日には、典礼暦の新しい年の始まりとしての待降節を迎えることになります。

教会の典礼暦は待降節をもって始まり、今日の、王であるキリストの祭日を祝って、一年を締めくくります。このような典礼暦に従ってささげられる日曜日ごとのミサに参加することによって、私たちが生きる一年一年の時の流れは、私たちがカトリック信者となることによって、私たちの中にお迎えしたイエスとともに歩む旅路となるのです。そのように受け止めることが出来るなら、典礼暦の一年の最後の主日の今日の王であるキリストの祭日は、私たちがカトリック信者として歩む人生の最終目標を私たちに強く意識させてくれます。

私たちが信仰によって私たちの中にお迎えしたイエスは、カトリック信者としての信仰をもって歩む私たちの人生の中にもとにいてくださるだけではありません。私たちとともに歩んでくださるイエスは、私たちに先駆けてあの十字架の死を越えて復活し、父なる神の右の座に就かれて、そこで私たちを迎えてくださるのです。父なる神の右の座に就かれたイエスが、父なる神とともに私たちを迎えてくださる天の玉座こそが、私たちがカトリック信者として目指す私たちの人生の最終目標なのです。王であるキリストの祭日の今日の福音は、私たちにそのことを、あらためて思い出させようと語りかけています。

世の終わりとか最後の審判という信仰の教えは、私たちに恐怖を感じさせるかもしれません。幼児洗礼を受けて、子供の頃に公教要理に通ったことのある信者さんたちの脳裏には、その頃の神父様やカテキスタの先生に教えられた、最後の審判の話が、あの時の強烈な印象は薄れてしまったかも知れませんが、今でも深く焼きついていることでしょう。子供の頃にそのような経験をしたことのない信者さんたちにとっても、最後の審判ということばは、写真集などで見たことのある、バチカンのシスチナ礼拝堂に描かれたミケランジェロの最後の審判の場面を思い起こさせるかもしれません。

私たちが受け入れたカトリックの信仰の教えは、今でも変わっているわけではありません。最後の審判の教えは、はじめてそれを聞いた子供のころの恐ろしい印象や、生き生きとした想像力をもって、あのミケランジェロの作品を思い起こす時、確かに、私たちを息苦しくさせます。けれども、私たちはカトリックの信仰を生きる者として、私たちが信じる信仰がもたらすそのような息苦しさから逃げ出そうとしてはならないのです。

世の終わりや最後の審判の信仰の教えは、時の流れの中に生きる私たちに全く新しい時間感覚をもたらします。

この世に生きる私たちは時を流れとして捉えています。そのような時間感覚の中では、私たちが生まれたのも死ぬのも、私たちの上を流れる滔滔とした時の流れの中の小さな出来事に過ぎません。私たちが自分の人生の中で経験した一つ一つの出来事も、それを思い出すことは出来ても、今となっては、あの時に戻ってもう一度経験することは出来ません。同じ時に同じ経験をした者たち同士が集って、思い出話をする事が出来ても、その仲間たちも、一人また一人と時の流れの中に飲み込まれるようにして私たちのもとから去って行きます。いつかこの自分の意識が消えてゆく時、私たちが人生の中で経験したことの全ては、跡形もなく、時の流れの中に消えてゆくのです。そのようにして過ぎ去ってゆく時間の流れの中に生きる私たちにとって、私たちが生きている今のこの時に果たしてどのような意味があるというのでしょうか。全てが時の流れの中に消えてゆくとするなら、私たちが懸命に生きている今のこの時にどれほどの意味があると言えるのでしょうか。自分の人生を懸命に生きてきた私たちが、ふとこのような空しさの想いに囚われる時、世の終わりや最後の審判の信仰の教えは、私たちにとって福音となります。

私たちのこの世のいのちは、滔滔と流れる時の流れの中にたまたま浮かび出て、やがて消えてゆく泡のようなものではないことを、私たちは教会と出会うことによって知ったのです。私たちの教会の信仰の中には、私たちがこの世で経験するのは違う時間感覚が息づいているのです。それが、世の終わりや最後の審判の信仰の教えが私たちにもたらしたものです。この信仰を受け入れることによって、私たちは、この私たちの世界に流れる時の流れの中から救い上げられ、自分の人生を生きた一人の人間として、今や神の右の座におられる私たちが信じたイエスの御前に立つ者とされたのです。私たちは他の被造物のように時の流れのままに生きるのではなく、時の流れの中であって自分が生きたと言える、自分の人生と言えるものを持つ存在であることをこの信仰によって知ることが出来たのです。私たちは時の流れのままに生きたのではなく、自分が生きた人生の責任を問われる者として、最後の審判の場に立たされるのです。この信仰を受け入れることによって、私たちは私たちが生きる今のこの時を、私たちに課せられた課題として受け止めるべきことを知ったのです。今のこの時をどのように生きたかが、最後の審判において問われることを知ったからです。

今日の福音は、最後の審判が、信仰によってそれを受け入れた私たちのため

だけのものではないことを告げています。「全ての国の民」が栄光の座に就かれた人の子・イエス・キリストの御前に呼び集められ、その裁き場に立たされるのです。ここに語られている、栄光の座に就かれる人の子・イエス・キリストこそが、私たちが今日祝っている王であるキリストのお姿です。

今日の福音に示されている、私たちが最終的に迎え入れてくださる王であるキリストのおことばを、あらためてしっかりと心に刻みたいと思います。

「あなたがたは、わたしが飢えていた時に食べさせ、のどが乾いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれた。」

このイエスのおことばは、それぞれの時の流れの中に生きている私たちの心にどこまで響いているでしょうか。今年、私たちはその時の流れの中で未曾有の災害を経験しました。自分たちの時の流れを断ち切ってまで、その災害に巻き込まれた人々に支援の手を差し伸べた多くの善意の人々の姿を目にしました。時は流れてゆきます。けれども、私たちが王であるキリストの裁きの座に呼ばれる時、私たちがその時の流れの中で遭遇した今回の事態について、私たちが裁かれるイエスは、私たちにどのようなおことばを下されるのでしょうか。

信仰によって、最後の審判の教えを受け止めたはずの私たちは、このことをもう一度真剣に反省するように求められていると思います。最後の審判において、王であるキリストはご自分が私たちにもたらされたものを、私たちがどこまで受け止めたかによって、私たちが裁かれるのです。イエスが私たちにもたらされた、愛の掟に従って生きることが出来る助けを求めて今日のミサをおさげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高